東北學院時報

第八十九號

會報

伊藤幹事

過般來學院の諸事業を尙一層統一し敏活ならしむる爲めに、幹事の如き職員を置く事を理事局に建議せんとの內議行はれつゝありしが、五月開會の同窓會評議員會に於て右の議を具体的に進行せしめ、鈴木重久、金矢武吉、阿部豊吉三氏を詮衡委員に擧げたり。

神の國とは何ぞ

シュネーダー院長

六月八日午後二時中學部講堂に開催せられし仙臺地方神の國運動宣言大會に於ける演說の筆錄。（筆責み鈴木）

基督がその弟子達に敎へ給うた所謂主の祈の第二の祈願は「御國の來らんことを」であつた。又山上の垂訓に於て「先づ神の國とその義を求めよ」と弟子達に命じて居られる。

又四福音書に記されてある通り傳道の御生涯を通じて基督は屢神の國の事を話され且つ又復活から昇天に至る迄の四十日間に於てすら「屢彼等に現はれて神の國の事を語り給うた」と記されてある。

以上の記事から見ても神の國の觀念は基督の理想と敎訓の最も重要なる要素であることが明かである。然らば神の國とは何ぞ。神の國とは何を云ふのであるか。「キングダム」即ち王國なる言葉が使用される所から或人は之を政治的觀念であると思はれるかも知れぬ。けれどもイエスはピラトの前で「我國は此世のものに非ず」と仰せられた。此故に神の國には政治的意義のないことが明かである。寧ろそれは精神的のもので、基督は「神の國は汝等のうちに在るなり」と仰せられた。パウロも亦「神の國は飲食に非ず、義と平和と聖靈によれる喜びとにあるなり」と云つてゐる。實際基督並に使徒等の言葉から「神の國」とは一大精神的理想であつて、それは此世に於ても益々充分に實現せられ、彼世に於ては遂に完全に實現せらるべきものであると云ふ意味であることが明かである。即ち神の前に立つても、人間同士の間に於ても、完全なる人間の義の行はれる狀態を指すのである。又神に對しても、人間同士の間にあつても、完全なる愛の行はれる狀態を云ふのである。

併ながら神の國は一大理想であると云ふ丈けに止まらない。若しそれが單に理想丈けに過ぎないならば、それは空想で永久に實現される時がないのである。コリント前書にパウロは「神の國は言に非ず、力にあればなり」と云うてゐる。神の國は單なる理想丈けに止まらない。その中には自らそれを實現する力が含まれてゐるのである。實現する力とは一か？基督は昇天されるの弟子等に對し「聖靈汝等の上に臨む時、汝等力を受けん」と仰せられた。そしてペンテコステの日に聖靈彼等の上に注がれた時、弟子達は實際其の力を受けたのである。ペンテコステの日に即ち千九百年以前の今日新なる靈の力が此世に降り、爾來此力が義と愛の神の國の理想の實現の爲に不絕働いてゐるのである。即ち個々の人に作用して彼等を生れ更らせ敎會を通しても作用し社會のうちにも國際間にも人種間にも作用してゐる。人類の眞の靈的救濟と進歩とは悉くこの神の聖靈の力の働きによるのである。

此故に仙臺市に於ける神の國運動宣言大會は誠に難有い出來事である。吾々基督者側に於ては一層充分に吾々の心と生活とを聖靈の力の感化に委ね、かくて一層よき基督の證人たらんとする努力である。之と全時に基督者ならぬ多くの人々に神の國の理想を示し、彼等を新なる力即ち聖靈の力に接觸せしめんとする努力なのである。

此故に私は此重要なる出來事に對し最も深厚なる祝意を表すると同時に三年間に亘る此運動の結果、聖靈の奇しき力に依つて仙臺市に於ける神の國の理想の實現が眞に且つ大に進展せんことを最も熱心に祈る者である。（六月八日）

初期學院の人々（其一）

吉田龜太郎氏（六回）

鈴木市治郎記

明治十六年の夏初めて日本全國基督敎牧師敎師聯合大會が東京市で開催された。仙臺敎會から押川氏出席して吉田氏はその留守を預つた。同大會で押川先生は「基督敎に適するものを敎ふ」なる題下に大熱辯を振ひ新島先生をいたく感動せしめたと云ふことである。押川氏より留守團長吉田氏宛に飛電あり、曰く「ミタマクダリヒジョウノトキキタダイセツキョウヲナスハゲミテイノレシンジテイノレミナアツマリテイノレ」と。即ち直ちに祈禱會を開いた。續いて祈つた。リバイバルが起つた。仙臺市を初め地方各地の敎會が一齊に活氣ついた。當時熱心に集つた者は次の人々であつた。遠藤陸郎、高橋毅、森立次郎、中村忠篤、齋藤昌國、鹽津隆三、邊見雄三郎、遠藤養之亟、小野直之、大浦嘉太夫、遠藤寛哉、伊藤悌三、横山覺之進、國分盛良、高桑全作。

明治十七年四月一日珍らしく雪降り三尺以上も積つた。此夜會員辯護士で傳道熱心家なる井上敎美氏の送別會が開かれた。席上吉田先生に聖靈降る。敎勢益旺んだ。吉田氏は惠まれた此喜を附近の各傳道地にも頒たんと押川氏仝道石卷、角田、岩沼、古川の諸邑を巡回した。小野平一郎氏の受洗入會したのも此頃だつた。仝年冬舊警察署より南三軒目の石內氏方に敎會を移す。敎勢振ひ會場狹隘を告げるに至つたからである。然るに引續き敎勢愈々勃興して再び狹隘を感じ翌十八年七月遂に畑谷紙店の跡を小西江戸屋より借り受けて其處に轉じた。

十八年三月押川氏の後援者スコットランドのメデカル、ソサイテー派遣傳道師ドクター、バーム氏に本部から歸國の命が下つた。從つて押川氏の給料も杜絕し、仝氏の進退問題が起つた。吉田先生は敢然として起ち福島宮城兩縣下に散在する信徒を歷訪して約束獻金を募集した。約束獻金月額合計六十餘圓に達した。即ち押川氏に三十圓の月給を支拂つて是迄通り働いて貰ふことにし、吉田先生は仙臺敎會の牧師、押川先生は福島宮